

航米日録 巻四

【ワシントン市滞留からボルティモアを經由してフィラデルフィア滞留まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974 年 12 月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名誉教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は()内に示した。
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に朱記にて示した。
- (5) 2 月 2 日午後 6 時頃に、東経から西経へ日付変更線を通じたので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に緑記した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦万延元(1860)年4月09日(新暦5月29日) 【4月10日】 晴。

滞留【ワシントン市】。午後写真館に行って、自分の全身の写真を大小 2 枚映して貰う。帰路、自分を案内した者が一人居た。何者であるか分からないが、その人物の意向に従って付いて行っただが、一町程でその人の居宅に着いた。二階に上がる。長さは十一二間【21m】、横六七間【12m】で、側に円形の小さな仕切りがあり、中に糲殻を敷き、これを足が傷つかないように踏みつけて、周囲二尺【60cm】の鉄の輪を一間ほど隔てて天井から綱で吊り下げ、又、五尺【1.5m】ほど隔てて木棍を左右の柱に挟み、或いは小さい鉄棍を天井から吊り下げて、色々の曲芸をする。その例を挙げれば、鉄輪へ手を掛け、左右順に輪を渡る。その速い事は、まるで猿の様である。又、小さな鉄棍を手に堅く持ち、上下に回転すれば、足首が天井に接するほどになる【体操の吊り輪のことか】。又、別の部屋が有り、ここに十貫目【37.5kg】程の鉄の輪を二個鉄棍で接合し、両手で高く挙げる。これは日本の力業(ちからわざ)と同じである【現在のウェイトリフティング】。これ又、珍しい物であった。午後 4 時頃帰館。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月10日(新暦5月30日) 【4月11日】 曇。

滞留【ワシントン市】。夜、ホテル【ウィラードホテル】の別の部屋でテーブル

の様なものを数十並べ、酒菓や草花を販売する。男女数十人が我先に来て、部屋中を歩き回り、夜8時過ぎに退去した。此の部屋には、中央に日本の国旗を張り、その左右に米国の国旗が張ってある。所々にシャンデリアが掛かってあり、爛々と輝いている。これはワシントン市の者が日本人との親睦を深めるためにこの会を開催したとの事である。このため、日本人がその部屋に入れば、酒菓や草花が与えられ、名札【サイン】を求められて煩わしいほどであった。これも又珍しいと言ふべきである。さて、草花を愛するのは米国人全般の慣習で、祝礼等の行事があれば人が集まる所には必ず草花を飾る。殊にバラの花を好み、老若男女が草花を携え持って来て、日本人にプレゼントする。尤も、花飾りにするには、銅線で円形に束ね、花瓶に入れたり或いはバルコニーに数十連ねている。その値段は一束1ドルから2ドルと言ふ。此の値段は高いと言ふべきである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月11日(新暦5月31日) 【4月12日】 晴。

滞留【ワシントン市】。午後雷雨。夜、ホテルの別の部屋で酒菓や草花を販売する。昨晚と同じである。夜中にホテルから三町【300m】程離れた所で失火があったが、直ぐに鎮火した。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月12日(新暦6月01日) 【4月13日】 曇。

滞留【ワシントン市】。午後にホテルの前にて音楽が演奏され、数人が行列を組んで行った。その列の中央に日本の国旗を建て、前後に米国の国旗を2・3本建てていた。そこに男女が前後に並んで市街を縦横に行進していた。その光景は日本の山王神社の祭礼に同じである。これは日本人と親睦を図りたいと言ふ人達が発案したお祭りであると言ふ。その心情の厚いことは、是によって分かるであろう。夜、別の部屋にての奇会は昨晚と同じである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月13日(新暦6月02日) 【4月14日】 晴。

滞留【ワシントン市】。午前10時頃、同伴3～4人でホテルから東北方向に足を進める。十五六町【1550m】行った所に大きな家屋が有る。高さは4階建てで、長さ十二三間【22.5m】横十間【18m】余り、周囲に木の柵を巡らしており、玄関は石造りである。これは病院である。最初に二階に上がる。大小の部屋が数十ある。男女の部屋は別々に分かれており、病人がそこに寝ている。一部屋に多い所で七八人、少ない所で五六人であり、病人が女性の場合は女性の、男性の場合は男性

の監視人【監視とあるが看護士のことではないか】が居る。寝室や食卓は極めて清潔に保っている。医者数人がその側に居て、時々診察している。一つの部屋に骸骨を展示している。それには五臓六腑が備わっている。他に、胎内の赤子、一ヶ月から十ヶ月経過した赤子の死骸が焼酎に浸してガラス瓶に入れられている。その形はまるで生きている様である。又一つの部屋に外科治療用の道具が有る。木材で四体を作っている。又まな板に似た大きな物がある。これは、治療する時に病人をここに乗せ、毒肉を除去する物であると言う。内科治療用の薬品は別の部屋に有って、全ての薬が備わっているとの事である。そこから奥に進むと部屋が数箇所有り、その内の一部屋に天主を安置し、正面に十字架を掲げ金色の裸体の人形を安置している。その後には男女が相對している画が掲げられている。左右に紺色のガラスへ灯火を点している。その光景はすこぶる深遠である。女性の僧が黒衣を着て天主を守護している。その部屋には男性が入るのを禁止している。我々を道案内した者は最初は男性であったが、その部屋に入るとき、女僧一人が付き添い、男性は部屋の外で待っていた。尤も、その女僧は常に十字架を腰の辺りにぶら下げていた。天主堂に入ると腰を折って礼拝する。これは病人のために安置しているのだろう。その他、病人の取り扱いについては一つの遺漏もなく、感心すべきものである。この病院を去り、一町程行くと獄舎が有る。長さ二十間【36m】、横十間【18m】で四階建てである。入口に監視人が二三人居て、手枷(てかせ)、足枷等の道具は全て此処に備わっている。二階は皆罪人の部屋で、各部屋は四壁皆レンガ造りで、窓は鉄格子になっており堅牢である。男女は別房になっており、官吏はその側の部屋に居る。周囲は皆土塀で高さは通常の二倍の高さにしている。その造りは如何にも嚴重であるが、時折、脱走するものが居て、鉄格子を鋸で切ったり、或いはレンガを破った痕跡が今尚残っている。罪人の妄乱は何処の国でも同じ様なもので、自分等を見て【罪人が】格子際に来て、妄言を發して無礼をなす。このため、二階の見学のみで帰る。これは日本人への無礼を恐れるためだろう。ここから北に向う。一商店があり、しきりに自分達を招きいれ酒を出して良く待遇してくれるので、暫らく休憩する。ここから五、六町【550m】行くと広い野原が有る。右折して一、二町【150m】行くと日本の梅屋敷に似た家屋が有る。四面が一町程【100m】で山桜を植え、その中に四五箇所の休憩所を設け、暫らくその場所に腰を掛けて休憩していたが、男女が集まり来て、或る者は握手をして接吻し、或る者は花を、或る者は酒を持って来て、わずらわしいこと甚だしく、直ぐにその場を去った。その場所より五、六町【550m】行き右折して九町程行くと、大きな堂の建物が有り非常に寂しい場所である。堂の正面に天主を安置し十字架を建て、左右に灯火を点している。前の方にテーブル数十個を並べて有る。ここは説教をする所であろう。ここを過ぎ三、四町【350m】行くと、

しきりに自分達を招く人が居る。行ってみると、鉛字所《印刷所》であった。長さ二十間【36m】、横八九間【15m】の四階建てである。一階は印刷する場所で、皆蒸気機関を用いた精巧な器械である。その歯車約20個程で、壁間の中央に一つの大きな仕掛けが有り、常時蒸気を以て回転している。これに接続して数個の歯車が回転する。それ故、その機巧により紙の出入、鉛字【活字】の印刷、及びインクの練り込み等が全てなされる。唯、その側に紙の出入を担当する小女子1～2人が居る。二階は活字の集合場所で、数十人の男子が鋳箱を並べて集合している。三階は印刷した紙を折りたたむ場所であり、ここも女子が担当し、小へらを以て素早く折りたたんでいる。側に別の部屋があり、折りたたんだ一冊の前後を断ち切って整形する。その側に一室があり、四面を閉鎖して常時蒸気の湿熱を蓄えている。印刷仕立てのインクは未だ乾いていないので、衣服掛けの様なものに掛け、数個並列にしてこの部屋に入れて乾かす。四階は出来上がった書籍の貯蔵場所となっている。その壁間に広さ五尺程の空孔があり、下層と連絡している。その空孔に広さ七八寸の板を入れ、左右の鉄の鎖でその板を釣っている。又、長い鉄棒があつて上記の板を貫いて常に栓で固め、書冊が上下するとき、その板に載せ栓を抜けば自在に上下する。是も蒸気機関の機巧を用いている。その精巧なメカニズムを理解することは出来ない。そこを去り、六七町程行くと、蒸気機関車の停車場があり、数十の車輛が並んでいる。各車に屋台の様なもの【客車と思われる】が六七個付いており、装丁は非常に美しいものである。ここより鉄道が敷設して各方面に通じている。ここを去って一町程東に向ったが、ワシントンの旧宅との事で、造りの大きさは今と同じで、且つ五階建てのレンガ造りである。破損が多く美しくは無い。此の家に7年前ペルリ【ペリー提督】と共に伊豆下田港へ来た某が居住していて、丁寧に我々を待遇し、日本から持ち帰った天保銭と下田の地図等を出して来て見せた。このことは奇遇と言うべきである。ここから二町【200m】程行くと、国会議事堂が有る。カピテンハウス《キャピタルハウス》と言う。ワシントン市第一の巨屋で高さ三四階である。出入口は四方にあつて、周囲が十町で鉄柵が設けられている。正面は東に向いており、石で出来た数段の階段がある。階上に石で出来た裸体の人形が左右に飾っている。一つは玉を投げようと右手を上げ、その側に一少年が恐怖しているものと、もう一つは男子が女子の手を取って呵責しているものである。その側に子供二三人が居る。これは悪魔を生け捕りにする像であるとの事である。そこから奥に入ると、周囲十五六間【28m】の石畳があり、その四壁に額を掛けている。全部で八個あり、土着人の戦陣の画である。ここから廊下が有り各部屋に通じている。右の三階に議事堂が有って長さ三十間【54m】、横二十間【36m】程で、中央を低くして下の階まで続いている。四面は皆階段で一階から三階まで続いている。諸事を議論するときは中央

の低い所に官吏と書記官等が並び、その事に関係する者全員が各階毎に座り、高い場所から低い場所を見る様になっている。このため、官吏の公私が明らかになり、国民が官吏に疑念を抱かない様にしている。その他の部屋は文武官の役所の一部となっている。建物の造りは、柱や階段には珍しい木や石を用い、壁や或いは窓にはガラスを用いている。天井には白亜を塗り、その四隅には数種類の人の彫刻が飾ってある。その美しいことは記述の仕様が無い。最も素晴らしいのは、西北の部屋である。長さ十二三間【23m】、横六七間【12m】で、左右の書棚に書籍が数千巻有り、中央に地球儀・天球儀の類がある。天井には金色が散りばめられ、夜になるとガス灯が点り、たちまち花となり部屋中が爛々と輝く。又、建物の中央に高さ数丈の円形の高楼が有って、下の周囲は六七十間【117m】、上が狭くなっていて二三十間【45m】の周囲である。ここに上る時は前述の石畳の中央に円形の階段が有り、螺旋の様である【ラセン階段】。これを上ると楼上是快適な場所で、ワシントン市が一望出来る。自分がこの議事堂に来て見聞したが、米国人の案内が良く教えてくれるのだが言語が通ぜず、建物の設計の緻密さを理解することが出来なかった。議事堂の後ろに三四町【350m】位の庭園を設けて細草・樹木を植えてあり、非常に閑静な場所となっている。所所にテーブルを設置し、休憩所としている。男女が来て遊んでいる。一通り見終わって市街を過ぎ、夕方に帰館する。夜に火事があったが場所は分からない。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月14日(新暦6月03日) 【4月15日】 曇。

滞留【ワシントン市】。午前8時頃、御奉行等がホテルより三里程離れた現在造営中の庭園に乘馬で行かれた。山河の風景を形どった非常に美しい庭園で、日本の別荘の様な感じの庭園である。ここに市街に配水する用水を貯蔵する大池が有るとの事である(自分は随伴することが出来なかった。その伝聞の大略を記す)。今日は日曜日で市街全てが休息している。ホテルの別室でキリスト教の説教があった。その席に居た人、数十人、全員謹んで説教を聞いているので、部屋にまるで人が居ない様である。その他、劇場・曲芸等を見る。この様に一人だけ楽しくなるようなことは見聞きすることは無い。これ、米国の慣習と思える。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月15日(新暦6月04日) 【4月16日】 曇。

滞留【ワシントン市】。午前8時頃、集団で病院に行く。帰途、市街を散策する。午後2時頃雷鳴轟き、雹(ひょう)が降る。その大きさは二三十目程である【尺貫法で「目」と言う単位は無い。重さの匁の事か?そうであれば、約90gである】。道路を往

来する人は雹に当たって怪我をする。この様な大きな雹が降ることは稀であるとの事。夜、ホテルの別室で世界各国の名所の影絵展《幻灯》が開かれる。その機巧・精密なことはまるで本物を見ている様で、この展も日本人を饗応するために設けられたものであろう。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月16日(新暦6月05日) 【4月17日】 晴。

滞留【ワシントン市】。午後、御奉行が大統領の居宅に行き、別れの挨拶をした。自分は市街を散策し、再び議事堂に行った。夜、またホテルの別室で影絵展《幻灯》が開かれる。大統領が来た。御者一人と女性が二三人同乗するのみであった。従臣を伴わず、普通の人と同じである。側に居る人も【大統領を特別の人と意識せずに】当たり前のように振舞っている。【日本のように主君に対して深々と】お辞儀をする人も居ない。自分達もその場に同席したが、どの人物が大統領であるのか分からなかった。夷俗【米国】では上下の別が無い事が、此の事例からも分かるであろう。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月17日(新暦6月06日) 【4月18日】 晴。

滞留【ワシントン市】。明後二十日出発に決まり、荷物の点検・荷造りに一日中混雑した。夜、またホテルの別室で影絵展《幻灯》が開かれる。昨夜と変わらず。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月18日(新暦6月07日) 【4月19日】 晴。

滞留【ワシントン市】。今日もまた、荷物の点検・荷造りに一日中混雑した。米国人が大勢部屋に入ってきて、別れの挨拶をする。繰り返し別れを惜しんで涙を流す者【米国人】が居た。情の厚きことここに極まる。これは米国の習慣のなせることなのであろうか。夜、またホテルの別室で影絵展《幻灯》が開かれる。

○寒暖計不試

ワシントン市情勢

ワシントン市は、一名哥倫比(ころんぴ)《コロンビア : District of Columbia》と言う(海国図志の言う所によれば、1790年大統領ワシントンが始めてその首都を設定した。そのため、大統領の名前を取って首都名とした。政治に必要な諸事を議論する総本山で、全部で三城を創設した。一つは華盛頓《ワシントン》と言

う。一つは査治当(ゲオルゲス)《ジョージタウン》と言う。一つは阿力山特厘阿(アレキサンドリア)と言う。この三者は皆都城にして、郡部の数に入れない。又、坤輿図識には、米国は初めイギリスの所属を離れて新たに独立国となった。此の時に全国的首都とし、大政庁となるべき地形を選んだ。ニューヨーク・ボストンの様な所は人口が沢山居り市街が大きいけれども、大政庁を置き、征伐・軍旅の大事なことを議論し、外敵から防衛する堅固な地形ではないとの事で、新たに土木事業をして此の首都を造築したとの事である。ここをワシントン市と名づけた由)。大西洋から二百里【320km】余り(米国の里法)離れ、ポトマック川と言う川がその海に注いでいる。しかし、水深が浅く巨船は通行出来ない。このため、河川用の蒸気船で通常は往来する。此の川はワシントン市迄は二つの流れが有り、一つは北から西に斜めに流れ、一つは北から東に斜めに流れており、合流して一つとなって流れる。この二つの川の間にワシントン市がある。東西三里【4.8km】余り、南北一里【1.6km】余りで、大統領居住は、市の中央から西南十町【1km】程離れて、川の側に造築された。議事堂は、市内最大の建物で中央より東南二十町【2km】弱離れている。町並みは碁盤の目の様に縦横整然としている。その間に、十字の様に斜めに貫いている大通りがある。諸道路が一点に集まるところには、四角或いは円い庭園を造り、周囲に鉄柵を設けて囲い、中に珍しい樹木や草花を植えている。且つ、市街の店舗の前に二間程離して楓樹を並べて植え、並木を作っている。その間にレンガを敷き、歩行者道路としている。中道は幅凡そ十五六間【28m】余り、ここは車道にしており、昼夜車馬の往来が絶え間ない。店舗については、高いものは七八階、低いもので三四階で全て華麗で目を楽しませてくれる。唯、ニューヨーク・ボストン等の大都会に比べれば繁華の程度は劣るという事である。しかし、その様子については左右に川があり、海から離れること二百里【320km】余り、水深が浅く大艦の通行は出来ない。四面皆山で樹木が鬱蒼と繁茂している。その要害さは他の都市の及ぶ所ではない。今、此の場所に首都を建設して、常時閑静にし、他の都市を繁華にするのはこれワシントンの遠謀であり、並大抵の人間の知るところではない。昔は人口僅かに一万三千であったが、今は既に六万人に達すると言う事である。

風俗

風俗は非常に純朴で、誠実を尽くし、気性は寛容で人を疑わず、自分達日本人を待遇すること、親戚と同じ様にしている。市街を散策するときには、数十の男女が我々を彼等の家に招待しようとして、得々と話しかけて来る。もしその家に入れば、握手して接吻【キスではなくハグと思われる】は勿論、美酒珍菓を出して近所の人を招待し、親しく交わることをなし、家中の道具・お宝類を惜しみなく陳列し

て見せてくれる。又、自分【玉虫】が商店で一二品買物すると、物珍しくて群がって来た子供達が、荷物を手に持ってくれる。甚だしい場合は、子供達が荷物を持ちたくて喧嘩する事がある。又、或る家に行った際、その家が非常に美しく、お金をテーブルの上に高く積んでいた。自分が来たのを見て主人がにこやかに迎え、テーブルの側にある椅子に掛けさせ、主人は奥の部屋に入って妻子を連れて来た。玉虫と握手させ、珍品・奇品を陳列して見せてくれた。もし盗人が来て盗み去ろうと言う事を主人が疑えば、お金を露出しておいてその場を去るだろうか。彼は全く気にしていない様子である。気性の悠長なことはこの様なものである（衣服等の装丁は本文中に記載するので、特には記載しない）。

時候

ワシントン市は北緯37、38度の間にあり、気温は寒から暖まである。自分達が来た時は四月であったが、未だに暑い日は来ていない。このため袷（あわせ）或いは単衣を着ており、日本の気候を思い出させる。且つ、常に晴れた日が多くて雨が少ない。自分達の滞留は既に二十日を過ぎるけれども、僅かに一二度雨が降るのみであった。風は静かで烈しくは吹かない。時たま雷鳴が鳴り大風が吹くことはあるが、直ぐに止む。

草木

土壤は肥沃なので草木はその数が多いのだろう。しかし官禁があつて遠くへ外出できない。このため、詳細は分からなかった。唯、市街に楓樹或いは日本の北の地方に生えるダモ《校正者分からず【山地に生えるアオダモではないか】》と言う樹、松樹や山桜を見る。梅や竹の類を見たことがない。蔬菜は胡瓜、インゲン豆、ニンニク、牡丹菜《キャベツのこと》の類を見るだけであった。

生物

鳥や獣の種類は多いと聞いているが、自分はそれらを見ていない。鳥獣を扱う商店で珍しい鳥を見たが、必ずしも此の地の産ではない。鳩やカラスが飛んでいるのを見る（カラスはポトマック川を航行したとき一二羽を見た。日本のカラスよりも細く且つ小さい）。トビ、スズメは一羽も見えていない。イヌ、ネコは日本と同じで、唯、大小がある。

貨幣

貨幣は、ここワシントン市では鑄造しておらず、他から来た物を使用している。米国中の租税は皆ここワシントン市に収納して、金庫に蓄えている。このため、

配布する給金は、全てここから出すと言う事である。

物価

ここは首都であるけれども、条約港ではないので、大抵の道具類は米国の物を他より海上運搬する。このため、物価は他の都市に比べれば少し高くなっている。今、一二例を挙げる。

- | | |
|--------------|--|
| 一 米三升程 | 50セント |
| 一 彩色コップ一対 | 1ドル |
| 一 時計一個 | 3ドル～200ドル |
| 一 観虫鏡《顕微鏡》 | 7ドル～20ドル |
| 一 ワシントン市地図一枚 | 3ドル |
| 一 写真鏡《カメラ》 | 25セント～5ドル【校正者はカメラとしているが、
値段が安すぎる。これは現像写真の事ではないか。】 |
| 一 輿地全図一枚 | 3ドル(但し大小により値段に甲乙あり) |

ホテル

ホテルは、着岸場から一里【1.6km】程西南方向に当たり、南に面した大きな造りのホテルである。前面の長さが半町ほどで、酒店・書店その他の諸品の売店が備わっている。横が一町程で、皆旅行客の部屋となっている。中央に出入口があり、上方向及び下方向の階段がある。後の角から六七間【12m】は旅行客の部屋となっており、その中央に出入口があつて、階段を経由せずに二階から直接道に通じている。これは土地の高低差を利用したホテルの造りにしているためで、前面は一階が直接道路と通じ、後面は土地が高くなっていて二階から直接道に通じている。ここから少し離れた場所に、縦六七間、横十二三間【23m】の家が有る。傍らに廊下があつて各部屋に通じている。その家の中は広くて一つの隔壁も無く、正面に縦二間、横一間程、高さ四五尺【1.4m】の木壇が有り、その上に長さ一間程のビロードで飾った椅子が有り、壁間に楽器の図を掛けてその前面に、出入口の上に前後六七間、横一間程の大きな壁が有る。その上に大きなピヤアーン《ピアノ》の様な物を置いて、その左に一人居て、ふいごの様な一木棍を上下している(これは風を入れるためである)。前に一人居て小片板【鍵盤】を押すと音が出る。その名をヲウーゲン《オルガン》と言う。部屋の天井にシャンデリアを二三個設置し、床は皆板敷きになっていて、机の様な長椅子を数十個設置している。ここは、日曜になるとキリスト教の説教をし、オルガンを演奏して衆人を慰める場所としている。(その日になると必ず男女数十人来てキリスト教の説教を聞く)。此の家の部屋数は総計407室で、7階建てである。廊下を縦横に作り、中央に花模様の

絨毯を敷いている。各部屋は四面白壁で、部屋の広狭によってベッド数を二つ或いは三つにしている。上官の部屋と思える部屋は、部屋の中に仕切りを設けて、一つは平生の談話・応接の場所とし、一つはベッドルームを設けて天井にシャンデリアを掛け、テーブルを一二個置いている。窓は皆ガラスである。部屋の広狭に従って鏡台を設けている。家具のどれ一つとして清潔でないものはない。食堂は多くは一階に有るけれども、このホテルでは二階にも有る。厠房【せいぼう：トイレ】はどの階にも有る。自分達のトイレは二階で一室に四つの便器がある。その内二つは官吏、二個は従臣用と区別している。何れも大小便一箇所が出来、必ず尻を掛ける所がある。その尻の当たる所は常に湯を循環させて暖かくしている。側に真鍮で出来た栓があり、これを上下させることによりお湯が流れ出て両便の汚穢を洗い流すようになっている。席【便座であらう】には布に「チヤン」《瀝青：コールタールを蒸留した塗料》で色々の形を描いた物を敷いている。トイレから半間ばかり離れた所に浴室がある。長さ一間二三尺、横一間ほどの大きさで、

その中に長さ一間、横五尺の湯桶がある。形は  の様で周囲は四角で、中は楕円になっており、鉄製である。湯桶は浅くて漸く膝が入るものである。一人用で寝そべって入るものである。桶の右側に湯と水の二管があり、常時はネジで口を塞いでいる。これを回せば水或いは湯が自由に出てくる。上には如露《シャワー》を設置している。湯桶の外左の方に長さ二尺、横一尺の鏡が掛けてあり、入浴が終わればここで髪を櫛【くしけず】る。一人が入浴終われば汚湯を流し出して、新湯を入れる。湯桶の中に一穴を開けて、常時栓をして穴を塞いでいる。終ってこれを抜けば、穢湯が流れ出すようになっている。一人の黒人従業員が常に側に居て、湯桶を掃除している。そのため、少しの汚穢も無い。御奉行の部屋は二階にあるが、自分【玉虫】の部屋よりも少し低い場所となっており、寝室・食堂・応接所が全て備わっている。家具は全て文様を施してあり、部屋毎にガラスの衝立が有り中央にはテーブルが有り、ビロードの椅子が六七脚左右に並べている。その他にシャンデリアが各部屋毎に有り、その素晴らしさは言を待つまでも無い。階下は諸物の売店で、前の方の中央に伝信機が有り、その場所から少し奥に入ると内室と思われ、米国人で混雑している。側に各部屋から合図用の銅線が敷設して一つの箱に集結している。その後に  の様な札を一つは13個ずつ10行、一つは16個ずつ11行に配置している。長押【なげし】の額の様に高く掛け、部屋で用事がある場合に銅線を引けば、上記の札が一回転して、部屋番号が出るようになっている。その他に、ベルを部屋の角に釣り、その下の小片板に部屋番号を記した物をつけている。そのため、ベルが鳴った場合、どの部屋で用事があるのかが分かる。その銅線は各部屋の角或いは隙間を貫く様にして設置している。その機

構は非常に精密である。その右側に庭があり(木は一本も植えていない)、中央に周囲が四五間程の石で出来た池が有る。池の中央に三層の石灯籠を立て、その頭上から水が噴出している。高さ一丈【3.6m】程の噴水で、滴り落ちる姿はまるで雨の様である。池の中に大きな亀が二三匹居る。ここから右に十間の所に壁が有り部屋があり、蒸気機関を設置している。ここから湯管を通して洗濯等の生業を営む(その機構を下記に記す)。灯火は全てガス製で蠟燭は用いていない。各部屋の灯火にガス管が通じていて、ネジでガスの通過・遮断をしている。灯火を点じようとするときは、ネジを左に回し、呼火を点火すると直ぐに燃焼する。消そうとするときは、ネジを右に回す。その制御は極めて絶妙である。ガスは他より供給されていて、ホテル中にその装置を見ることは無い。階上に銅管を敷設し、水を供給していて、全館水の便利を享受しない所は無い。これ又、ネジで水の流れを開閉する様にしている。水は屋上の空いている場所に鉄製の水桶二つ程を重ねて二箇所に置き、水桶の形は方形で周囲が九尺、高さは五六尺である。水を貯蔵するにも蒸気力を利用している。廊下には木刻の人形が小さい台の上にある。夜中は所所に灯火を点じている。ホテル中は爛々としている。その他、家具の文様が一つとして美しくないものは無い。伝信号機の器械は縦一間二三尺、横一間の部屋に設置し、入口正面の側に柱があり、鉄の小片板二枚で一枚の小さい紙を挟み、小さな台の様にその中央に有る。屋上から二つの銅線がこの板を貫通し、下の器械に接続している。その鉄板の上三四尺の所に小さい鉄棍があり、長さ五寸、それから周囲二分程の鉄線に接続して屋上を貫通するようにしている(これは除雷のためで有るとの事)。その前に長さ四五尺、横三尺のテーブルがあり、上に手で銅線を貫通させる器械がある。その形は、の様で真鍮で出来ている。そこから少しばかり離れて銅線の極く小さいものを絹糸で巻いた物を周囲一寸の枠の様な物へ巻いて、一寸五分ばかり離して左右に縦に並んでいる。その高さは凡そ一寸五分である。その上に鉄製のの形の物へ鉄針を付けた物を置き、その左右に小さな車が有る。銅線の通塞に従って回転し、鉄製の物がこれに従って上下し、点々と長短の針跡を紙に印字する。これによって、相手方の用事が難であるのかを知ることが出来るということである。その紙はテーブル上の壁間の所に別に歯車を設けてそれに巻き、テーブル上の歯車に接続し、その歯車が回転するのに従って、自然に下に段々と折り重なっていく。その歯車は、テーブルの下に分銅を吊り下げ、平生何も無いときは鍵を掛けて動かないようにして、これを外せば分銅の重さによって回転する。ここより斜め方向に少し離れた所に銅線を巻いた枠を横に二つ並べ、後に屈曲した一寸程の銅線を平直に引き締めて置いてある。これは前の銅線に貫通している。テーブルの下に壁間に沿って三つの瓶を鉄の箱に入れ、ガルハニ《ガルバニ電池》等を貯蔵している。これより【此の電

池の力により】引っ張る力が出て、四方の銅線を揺動する。細小の銅線を巻いた枠の様な物も、皆引っ張る力を強化するためにあるということである。蒸気機関は、ホテル売店の右側の隔壁を設けた別室に設置されている。長さ三間、横二間で入口は北側に面して、その中に湯管を前後斜めに二つ設置している。前の湯管は常時は用いず、後の湯管は平生用いている。その形は日本の銅で出来たかまどの大きなもので、周囲が二間程、火を焚く所は後管に一箇所、前管に二箇所ある。後管の少し斜め前に周囲一丈、高さ二丈程の大きな鉄管を立て、その側に小さな鉄管を上下左右に二三本貫通させている。湯管から洗濯所や浴湯所へ廻すためである。或いは他から水を引き入れて湯管へ入れるためである。前管の側に小さな気筒があって、蒸気を数管に通している。又、別に小さな部屋が右側にあり、車輪が一つある。その左右に気筒が有って、蒸気を通してこの車輪を回転させている。これを第一車輪と言う。この車輪より壁間を貫通して次の部屋にまた車輪が一つ有って、第二車輪と言う。この両車輪に革帯【ベルト。以下ベルトと記す。】を付けて回転させる。ここから十間ほど離れた所に又車輪があり、これを第三車輪と呼ぶ。第二車輪から鉄軸を貫通させている。その側が浣濯所【すすぎ場】である。長さ二間、横三四尺の箱を二個並べている。箱の中は数十の小さな仕切りがあり、その仕切り毎に小さな片木を吊るしている。形は  の様で、その隙間に汚れた衣を入れる。この二箱の中央に二つの小さな歯車を設け、一つは形が  の

様で、常時回転している。もう一つは形が  の様で、常時はネジで回転を止めている。浣濯するときはネジを回して箱を左右に回転させると、汚れた衣は自ら伸縮して直ぐに污垢を洗い流す。少しの間に数十の衣を洗うということである。その上に二つの車輪が並んでいる。一つは第三車輪からベルトで動力が伝達されている。これを第四車輪と言う。もう一つは、第四車輪の鉄車軸と連結して回転している。これを第五車輪と言う。第五車輪から箱の中央の車にベルトで動力が伝達して回転させている。又、第五車輪の車軸が二間と長くて前壁の車輪に連結している。これを第六車輪言う。その下に車輪があり、ベルトで連結して回転している。その側に脱穀機に似た物がある。車輪の回転に従って廻り、洗濯し終わった衣の水を絞り去る【脱水機の事と思われる】。その右側に一間ばかり離れて長さ一間半【2.7m】、横二三尺【75cm】の箱がある。一尺五寸【45cm】づつ仕切りがあり、各銅管を通じて水湯を出す。ここは手ですすぐ所である。先の浣濯箱も同じく銅管があって水湯を出す。この部屋は長さが三間、横二間程である。ここから左の方に洗濯した衣を乾燥させる部屋が有る。四面を閉塞して蒸気管を通し、常時温気を蓄え、幅一尺、高さ一間程の衣服掛けの場所が有って、衣服掛けは18個、衣服掛けごとに横一面に板を吊るし、その板に取っ手を設けて部屋に出入さ

せている。これに洗濯した衣服を入れれば、直ぐに乾く様になっている。又、部屋に上り階段が有り、衣服を平圧する所がある。長さ一間、横三尺、高さ五尺程の箱を置き、左右に小さな角材で縁を造り、動かないようにしている。箱の下に円形の木棍二個を入れ、これで平圧する。箱の中央の側に二つの歯車が前後して設置され、前の歯車は階下に通じていてベルトにて常時回転している。後の歯車は箱の上から鉄棍を貫通させ、その側に小さな鉄棍が接続してあり、これを引くと前の歯車のベルトから後の歯車に力が伝達して回転するようになっている。この回転によって箱が左右に回転し、円形の木棍を動かして衣服を平正させる。又、箱の上の中央の側に鉄製の  の様な形の物があって、箱の端に別の鉄製の物を載せているものもある。ここへ手で【何を?】載せれば箱が自動で上がる。これにより洗濯した衣服は出入りが自在に出来る。又、その側にテーブルの様な物を所所に設け、テーブル上で火斗《ひのし:アイロン》を用いて衣服を伸ばしている。

その火斗は日本の物と同じではない。側面の形は 、正面の形は  で、火中に入れ、その火気を衣服に当てるようにしている。この部屋には衣服を乾燥させる所が有り、前述の場所よりは狭小である。その機構の精巧さは一見して簡単に説明することは出来ないが、大略は以上の様なものである。且つ、ホテルの待遇は極めて良く、饗応する米国の官吏、兵士及び医師二三人が昼夜ホテルに来て警護する。日本人が外へ行こうとするときは、必ず車馬を手配し、案内人一人が付き添うようにしている。食事は御奉行へは酒菓・魚肉・米飯・パン等数種類がある。その以下の者にはこれに準じた物が出る。唯、従臣には初めの二日間は朝、御飯・パン・魚肉一種類及び卵・砂糖・牛乳等を出す。昼は氷水・菓子・魚肉・野菜・卵の数種類であり、酒は一時も出ない。これは米国の官吏からの要望である。その待遇は丁重であるが、二三日経過すると少し落ちてきて、飯・パンの他魚肉一種類及び焼卵・菓子・九年母【柑橘類、みかん】の類のみとなった。コーヒー・湯茶は朝晩出る。何れも薄味で食べることが出来ない。テーブル上に塩・醤油・酢・辛子・胡椒等五六種出ているが、日本の味ではなく、一行は皆困惑している。

以下はワシントン市滞留中の事に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『ワシントン市滞留中の事』

この地に来て日本の官吏から、戸外へ一步も出てはいけないとの厳禁が有った。たとえ止むを得ず外出する場合でも官吏が付き添う。且つ大抵は、時計・羅紗・ビロードの類を買い求めようとして、空しく市内を歩き回って帰宅するばかりで

あり、政治的制度・情勢を探索しようとする志のある者は居ない。且つ、一人で二・三個或いは四・五個を買い求め、定めて帰国後に【それらを】売買して利益を得ようとしているのだろう。価格の安い品物を選らぼうと奔走している。実に見苦しい事ではないか。自分は学校を尋ねたいと頻りに願ったが、誰一人として付き添うものが居らず、終に願いを達することが出来なかった。いわんや貧院《養老院の類》や幼院《孤児院》を尋ねることは尚更出来ないことである。これは皆情勢・風俗等を探索する場所で、第一に尋ねるべき場所である。今回の米国使節一行の内、御奉行を始めとして誰一人その様な心を持った者は居ない。一方、米国人は一つも隠し立てする所無く日本人に見せようとするけれども、【日本人側に受け入れようとする】心が無いのはどう仕様もない。他に伝え聞く所に抛れば、御奉行等は何もせずに部屋に閉じこもり、他に一步も出ず、非常に謹慎しているとのことである。しかし、米国の民衆は日本人の考えとは違い、【日本人が外部に出ないのは】恐怖しているからではないか、或いは無学無術で外出が却って迷惑になるのではないかと心配しているのではないかと行って一笑しているとの事である。これはその様な理由が無いでもない。日本の官吏共に至るまで、米国側から招待されているにも係らず簡単には行かず、数回の督促で初めて行く。これは大いに尊大さを示す心持であろうが、平生の行動を見れば、何事に抛らず米国の意向に沿わない事はなく、たまたま尊大さを求めているがどうしてその様なことが出来ようか。又、物好きの者は時計・羅紗の類を買い求めるのに 100 ドル或いは 200 ドルを支払って一器を買うが、これらは本当に玩具である。上位の者がこの様な物のみに心を使えば、その部下の者が競ってその様な物を買う事をどうして咎めることが出来ようか。嗚呼、今回の航海は全て日本の恥辱を晒すことが多くなるだろう。

前記した様に、米国の男女が日本人を見ようとして、ホテルに来ること幾百人で有るかが分らないほどである。日本の器物・道具を非常に好み、一紙片を得ようと重器を持って来て、強引に取引しようとする。【日本人一行の中に】狡猾な者が居て利益を得ようとして秘かにホテルを抜け出して徘徊し、米国人と親交して、兼ねてから貯えていた紙片・筆・小物を提供し、その見返りに珍器・奇品を得た者が居た。米国人はもとより気宇壮大で、且つ日本人と初めて接触するので、損益に係らず取引する。しかし、日本人は益々その機に乗じて奸計を巡らして利益を得ようとしている。米国人がこの事を理解すれば、中国人と同じく【日本人を】軽蔑するであろう。且つ、物価も昔に比べれば倍位いに高騰しているので、それを踏まえて取引すべきである。そうでなければ、物々交換で取引すべきで、金銀での取引は止めるべきである。今、急にこの様に変更すれば、米国人は必ず疑念を持ち、支障があると主張するだろう。その時は、万国の物価を比較検討して処

理すべきである。その様にすれば米国人も文句は言わないだろう。唯憂慮すべきは、万国と貿易しようとするれば、諸品の製造【能力】を今の 10 倍ほどに引き揚げないと駄目であろう。限りある人力を以てどれ程頑張ったとしても、達成することは出来ない。貨幣の損益は、論ずる遑(ひま)が無い。【日本の】国は既に衰弱しており、これを改善しようとするならば、蒸気器械を製造して、一人で百人分の仕事をする方策を実施する外に無い。その様にして【合わせて】貨幣の改革をすれば、百年千年【原文は千百年】貿易をしたとしても、衰弱の憂いは無いだろう。位の上に居る君子は、この様なことに気を付けなければならない。』

旧暦万延元(1860)年4月19日(新暦6月08日) 【4月20日】 晴。

午前 8 時頃ホテル【ワシントン市】を出る。御奉行を始めとして従臣に至るまで皆車に乗り、東の方向に向かう。十五六町【1550m】程行った所に大きな建物があり、屋根が高くて長いものである。ここは蒸気機関車の停車場である。大小の蒸気機関車数十輛、その内、美しくて長さが七八間の客車五輛を接続した列車があり、これに一行が乗って発車する。あつと言う間にワシントン市を去ること五六里で、左右は皆平原で、樹木は有るが大木ではない。所々に牛・馬・豚・羊を放牧しているのを見る。ここから六七里の所に七八軒の家がある。民家で四壁を板で造り、白亜を塗っている。近傍に畑があつて、小麦を植えている。又、十里ほど行くと平原が続く。列車のスピードは速く、目眩がするほどである。此の辺りは松・檜が多く繁茂している。又、七八里程行くと、ホールトモル《Baltimore: ボルチモア》に着く。ワシントン市から五十里(80km, 米国里法)であるが、米国の時間で一時間四十「ミニート」《分》で到着した。その時間の短さには驚き入るばかりである。この都市の入口に停車場があり、屋根が高くて二階建ての石の門がある。その門の外に車馬数十輛を配備し、日本人一行の来るのを待っていた。列車を降り、その車馬に乗る。このとき、警備の小砲隊が左右前後に整列した。隊毎に、青・紅・白等の色で分けていて、大数二抜隊程である。他に大砲隊・騎馬隊・楽隊・消防手・啓行兵《工兵のことであろう》一つとして欠けるものは無い。総計で千五百人である。ここから市中十五六町行くと大きな建物に行き着いた。そこは武器製造所との事である。そこで暫らく休憩する。予め設定されていたと見えて、長さ十二三間、横三四間の板張りの床の家に一間程の長椅子を左右に数個並べ、又四壁に大きな棚を設置し、そこにヒバ或いは草花を飾り、又日本と米国の小さな国旗を椅子毎に掲げている。男女数百人が日本人を見ようとして雑踏し、あたかも日本の神社の祭礼の様である。この場所を去り、車に乗って市街を縦横に散策し、午後 2 時頃ホテルに到着した。市街散策は米国の饗応で、一つとして残すところが無いように懇切に案内されたが、突然の事であったので、

【事前の準備が無くて】自分の方向感覚が無くなった。唯、所々に大きな美しい建物を見る。且つ、米国人が日本人を見ようとして道路に並んでいたりと、二階の場所に充満していた。甚だしきは、屋上や塀の上に登り、その数が幾万人なのか分からない。日本と米国の小さな国旗を各階に飾ったり、手に持って振っている。国旗を持っていない人は、白いハンカチや帽子を脱いで振っている。これは米国の礼法と思われる。左右を小砲隊で厳重に警護されていると言っても、禁を破って車の側に来て握手を求め親睦の情を表わす者も多い。その応接は煩勞を極めたが、唯、その情の厚いことは男女に限らず丁重に待遇してくれる。暑いと感ずれば扇子を差し出し、喉が渴いていると思うと水を提供してくれる。或いは珍しい品や貴重な品を持って来て強引に提供する。もしこれを【日本人一行が】辞退すると失望の色を顯にする。殊に日本人の名札を好み、白い小さな札を持って来て、【日本人の】名を書いてもらうことを実に親切に求めてくる。止むを得ず、一応書いたが、次から次にと四方から我先にと来て、あつと言う間に書いた枚数が数百枚に至った。筆墨を持って米国人が来れば「ノー、ノー、ノー」と言う。「ノー」とは「無い」と言う言葉である【玉虫が「ノー」と言ったと解すべきか】。その煩勞は思いしるべしである。午後4時頃、ホテル《Gilmore House》の前で防火法と花火を以て饗応される。ホテルの前は幅50間、縦二町の道路があり、中央に石を高く積み、その上に石の人物彫刻像を飾り、四隅に石で作った鷲の像がある。その高さは凡そ十五六丈である。これはワシントンが英国と戦った後、この地を開き造立したと言うことである。さて、防火法については、自分【玉虫】は疲労困憊していて座睡し、見ていなかった。唯、他の人の言うことを記述すると以下である。消防隊は総計で七隊、車上に蒸気機関の機巧を載せ、革管【ホース】、長梯の類を車で運送する。車はその場から他所へ移動する。蒸気力を利用して水を汲み上げ、ホースで四方に水を散水し、必要な時は長梯を自在に上降する。又、左右前後に消防士が集まり、消火作業に就く。その消火術が多く、簡単に述べることは出来ないとの事である。夕方に花火の打ち上げがあつた。始め流星花火の様な物を打ち上げ、空で破裂し、赤色又は緑青色に☆の様な形の物が数十個飛散した。又、転紡車(クルマハナビ《車輪状に回転する仕掛け花火》)があり、色々の形を成していた。一つの花火で三四種類に変化したものがあり、非常に珍しかった。観客は数万人がホテルの外に充満して、立錫の余地が無く、【花火の素晴らしさに】互いに我先にと声を発して、喧騒が辺りに満ち満ちていた。

○寒暖計不試

勃兒多謨璽府形勢《Baltimore：ボルチモア》

ボルチモア市は「マレーラント」《Maryland州：メリーランド》の港で、ハスフ

スコ河《パタプスコ河：Patapsco》の側にある。その河は巨大で、「チェサピーク」河に通じて海に達している。米国里法で三百里【480km】である。又、市街に通じる川があり、この川は人力にて開削したとの事である。この都市は非常に便利な所で船舶の往来が絶えず、自分達一行が来たときは、既に数百隻が碇を下ろしていた。市街は縦横に分割され、広さは東西四五里、南北二三里に亘る。人口は稠密で、所々に高さ凡そ数丈の高樓が有る。又、伝信機・鉄道路を施設し四方に通じている。商売の盛んなことは、ワシントン市の倍である。米国の州中の大開港場の一つと言われており、確かにその通である。人口は始め僅かに三四万人であったが、今は既に二十万人になっている。その経済活動の盛んであることはこれで分かるであろう。(オランダの書物では、ボルチモア市に三つの港があり、第一の港は「マックヘンリー」と「ラサレット」の間、広さ二百五十三間である。第二港は「ヘルスホオント」にあり、第三港は内港で水深一間三尺九寸、市街に深く入っている。又、市街中に開港に関する記念碑が沢山有り、中でもワシントンの記念碑が最大であるとの事である。台柱は白い蠟石で出来て居り、高さ二十七間、上にワシントンの肖像があり、その高さは二間一尺二寸である。その次はハッテル氏を記念した物を尊崇している。1814年、この人が大いに勇力を發揮してこの都市を警護した。遂に英国軍を撃退して、土地の人はこれを尊信しているとの事である。《これは1814年の英国との戦闘・撃退を記念したもので《Battle Monument》、それを玉虫は人名と誤解したものであろうとの事》。そうであれば、この都市の創立は僅かに50年前で、そんなに昔の事ではない。)

風俗

風俗はワシントン市に比べれば軽薄であると言われている。これはこの都市が交易による繁華の街であり、他国の人が多く訪れるためであろう。しかし、自分達に対しては特に軽薄な行動はしない。市街地を散策するときに、自分達と親しもうと握手する者が多く、殊に珍しい物や稀有な物を持って来て無理に与える者が居る。その他、人の寒温を察知して心付けして慰労することが実に丁寧である。このため、浮薄と言われているが、本当の浮薄ではない。

時候

この都市は北緯39度余りで天候は極めて良く、特に蔬菜や麦類の生育に良い気候である。自分達が来たときは四月の下旬であったが、寒くも無く暑くも無く中位の気候で、自分の故郷【仙台】を思い出させる(訳書には、【メリーランド内の】全ての都市の気候は皆良く、健康に取って良い土地と言われているが、「スプリングアデン」《不明。ボルチモアの北部の地方か》の一部は気候が悪く1849年人口

15万人の内、死者が4165人に上ったとの事である)。

草木

この都市は、綿・麦・菓草の類が多いと言われているが、短時間の滞在であったためそれらを見ることは出来なかった。唯、道路に松・檜・落葉松が植わっているのを見た。蔬菜は、大根・ニンニク・エンドウ豆を見た。

生物

生物については、時間が無く探査することは出来なかった。唯、犬・猫を見た。その形はワシントン市で見たのと同じである。ツバメ・スズメ・カラス・トビは居ないとの事である。

貨幣

貨幣も時間が無く探査することは出来なかった。繁忙な都市なので貨幣の流通は盛んなのであろう。

物価

多忙なため、一物も購買しなかった。そのため、詳細は分からない。

ホテル

ホテルは七階建ての大きな建物である。各部屋は美しく装備されている。その造り方・構造は大抵、以前に泊まったホテルと同じである。唯、ワシントン市のと比べれば、遠く及ばない(三舎を避く)。通りの名はカルヘルト《Calvert Street》、ホテル名をストレート《ホテル名は前述の様にGilmore House。ストレートは通りの英語ストリートの間違いで勘違いしている》と言う。

旧暦万延元(1860)年4月20日(新暦6月09日) 【4月21日】 晴。

午前10時頃ホテルを出発し、東北方面に十五六町行った所に停車場が有り、そこから蒸気機関車に乗る。四輻の客車を接続する。車輻の中央に日本の国旗を記した幕を張り、その他どれ一つとして美しくないものは無い。そこから十五六町程、川に沿って走る。川は大きくて巨船が自在に往来出来る。ここを過ぎ半里ほど行くと平原になる。松・檜・落葉松が多い。畑には麦苗のみを植え、稲田は一つも見ない。人家は点在して、全て民家であり、四面白亜に塗っている。この近傍に牧場があり、皮肉肥大な牛馬が寝ていたり或いは戯れており、その数を枚挙することは出来ない。この場所で畑を作っているのを見る。馬の後にベルトで

鋤を結び、人が馬の側で指示する。これは日本の水田を作る方法と同じである。ここから七八里程行くと大きな河がある。河の名はポンハウスリッキ《Gunpowder River》と言う。ここに橋が有り、幅一里で分岐し、広い所は二里ほどになる。又、行くこと数里でシュスキハンナー《Susquehanna、サスケハナ。【ペリー提督が乗ってきた黒船の名がサスケハナである】》と言う所に来る。又川がある。名を「ハーフルテカラス《Havre de Grace。サスケハナ河の河口の町》」と言う。大河で幅十町余りだが橋は無く、蒸気船で蒸気機関車を運送する。兩岸に栈橋を架け、船と栈橋を同じ高さにして鉄道を敷設し、陸上から直ぐに蒸気機関車を船に載せ渡すことが出来るようになっている。その船は長さ凡そ四十間余り、横十間で船の形は四角である。船上は平坦で鉄道があり、両端には車輪を設置し、蒸気で回転する【転轍機】。中央に煙突を設置し機関車を縦に載せ、前岸に送り出す。前岸には同様に栈橋を架け、機関車を走らせる。ここを過ぎ十里ほど行くと大きな村がある。人家・寺院などが多数有る。男女が数百人寄集っている。右に幅一里程の大河が有り、この川に沿って走る。船舶の往来が絶えず、これはフュテルヒュ《Philadelphia。以下「フィラデルフィア」と記す》から流れて来ているとの事である。この辺の土地は低くて榆・柳が多く生えている。ここを過ぎると又大きな村が有る。前の村と同じである。又行くこと数里でフィラデルフィアに着く。ボルチモアからここまで99里で有るとの事。それを僅か4時間24「ミニート」で停車場に着く。この停車場は屋根が高く、又長い。停車場の外には馬車が百輛来て待っていた。その車輛に一行が乗って市街地に行く。警備は小砲隊100ペロトン《オランダ語Peloton：分隊》、騎兵隊3ブリカーテ《オランダ語Brigade：部隊》、楽隊67個、啓行兵凡そ100人程である。啓行兵にはハンカチに「米国は日本の朋友の到着を歓迎する」と日本の字で書いた物を襟の側に掛けている。何れも左右前後に配列し、極めて嚴重である。その他に、別装備の小砲隊があり、首に白いハンカチを巻き、日本の槍丁《槍持奴》の帯の様である。腰上には袖の短い衣を着て、腰下は俗に言う立付《上部が太くて、すそが狭いズボン》の袴を着ている。この服装は、昔の物であるとの事。市街では我々一行を見学する見学者の数が十万人である。道路に群列するのは勿論、屋上或いは塀に登り、空き地には臨時の栈敷を作る。各人が日本の国旗を携え、自分達を見てこの旗を振り、商店には日本産の雨傘・塗物等を竿に縛って高く掲げている。これは日本人の人目を引くためである。その他、ハンカチ等を振って親善の礼をなす。その繁華ぶりはボルチモア市の倍である。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月21日(新暦6月10日) 【4月22日】 晴。

滞留【フィラデルフィア】。ここのホテルは巨大ではあるが、自分達の部屋は嚴重に隔絶され、他に行くことが出来ない。これは米国人がみだりに往行することを禁じるためであるとの由。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月22日(新暦6月11日)【4月23日】晴。

滞留【フィラデルフィア】。男女が禁を破って秘かに部屋に来て、日本の器物を好み、殊に煙管・大小刀に注目している。煙管一本に1ドル以上の品物を持って来て、無理に交換しようとしている。ワシントン市滞留中から煙管をプレゼントしているので、残り僅かに一、二本になってしまった。今、これをプレゼントしてしまえば煙草を吸うことが出来なくなってしまうので、止むを得ずその旨を説明してその場を取り繕った。大小刀については、米国人も高価なものであると認識しており、無理に交換しようとはしない。唯、珍しいものとして刀身を抜き、手でその切れ味を試している。側からこれを見ていると非常に危なっかしいが、米国人は気にしていない。その応接は甚だ煩わしいものであった。午後2時頃、御奉行等が遊園に出かけられたが、お供することを許されず、他人の話を聞くと以下の様であった。その所はホテルから3里【4.8km】程離れた場所で、広大な敷地で出来ており、前は大河、後は平山で松樹が繁茂している絶景な場所である。そこには貯水池があり、水車の機巧を用いて池水を山上に揚げ、市中の用水としている。今日数回火災が有り、消火設備を車に乗せ現場に行く。車上に日本の国旗を掲げている。これは日本人一行に見せたいということであろう。その消防車の進退は閑静で何も無い平日の様である。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月23日(新暦6月12日)【4月24日】晴。

滞留【フィラデルフィア】。昨日と同じく、【日本人一行を見ようと】人垣が出来ている。或る人が劇場に行き、帰って来てその内容を説明したが、観客席、舞台等は日本と同じである。その内容は、男と女が逢瀬を約束して、男から夜中にこっそりと女の家に行き、人目に触れて狼狽するものであった【ロミオとジュリエットの事か?】。唯言葉が分からず、一々詳細を理解することが出来なかったと言うことであった。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月24日(新暦6月13日)【4月25日】晴。

滞留【フィラデルフィア】。午前8時頃、御奉行等が金銀工作場に見学に行き、

午後ホテルへ帰られた。午後 2 時頃、ホテル内の蒸気機関を見学した。大略はワシントン市のホテルと同じであるが、多少大きめである。ホテル内にはあらゆる物が備わっており、客が使う物に何一つとして欠ける物が無い。夜、日本人の饗応として影絵が催された。その素晴らしさは、まるで本物の様であった。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月25日(新暦6月14日) 【4月26日】 晴。

滞留【フィラデルフィア】。午前10時頃、市内を散策する。家毎に自分等を見て頻りに家に招き、種々の小物をくれる。又、男女が雑踏し左右前後に自分等を囲み、その熱気で暑くなる。その煩わしい事は今更言うまでも無い。帰り道、車道に散水するのを見たが、それは車に水桶を載せ、桶の底に小穴を空け、馬に車を引かせて走らせるのである。桶水はこれに従って滴り落ちる。散水は、しばしの間に数十町に及ぶ。午前 8 時頃から御奉行等がフィラデルフィアの造幣局に行く。何事なのか自分には分からない。或る説によると、日本の二朱金を分析し、その価値を同定すると言うものである。午後、日本人一行に見せようとして、風船【飛行船】をニューヨークまで飛ばす。自分はそこに行ってみることが出来なかった。以下はそこに行った他人の話を記す。風船の乗る所は木で編んだザルの様な円形の、周囲が一間五尺程のものでその上に薄絹をゴムで塗った丸い袋があり、その周りに綱袋を覆い、四面に数本の紐を下げて堅く風船に結び付けている。大抵、四間四方程である。上昇する時は、側で石炭を焚き、その石炭を鉄管で袋の中に送入して、四方の紐に鉄で錘とし、袋の膨張するのを待って錘を解き、籠の中で一人舵を取り上昇する。今回は二艘の風船を飛ばしてニューヨークまで行かせる。風船には日本と米国の国旗を掲げてその旗を振っていた。凡そ一里【1.6km】程上昇し、東北の方向へ向う。暫らくすると風船はその姿が見えなくなった。ここからニューヨークまで日本の五十里【200km】は有るが、半時【1時間】で行き着くとの事である。又或る説によると、風船に蒸気の機工を用いているものがあり、これは一番速いと言う。そのため、日本の遠隔地と言っても六昼夜で行けると言う事である。唯、天上は空気が希薄で死に至る者が多く、その他に害あることが少なくないとの事である。このため、風船の飛行を常時は禁じており、已むを得ない場合のみ、これを用いると言う。今回、この風船を見せたのも一方なら無い米国の饗応のためである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月26日(新暦6月15日) 【4月27日】 晴。

滞留【フィラデルフィア】。午後市内を散策し、造花を売る店に来た。その造

花の美しいことは、本物の様である。一本の値段は、安くて2～3ドル、高くて5～6ドルである。16歳になる娘が来て、自分【玉虫】の名刺を欲しいと言って来た。一寸書き与えると、左右から数人が遣って来て、たちまちの間に数百枚になってしまった。その後、店の二階に案内され、行くと一人の老人が居た。自分【玉虫】の着ていた外套と笠をその老人が着用して、自ら鏡の前に立って可笑しさの余り笑ってしまった。その老人は自分【玉虫】達に米国の笠【帽子の事か?】を一個くれたので、遠慮せずに貰った。この場所から又所々に散策に出かけた。別の店で又頻りに自分を招き寄せてきた。そこに行ってみると、石版で画を印出する所であった。石版を台上に置いて良く拭き、白い絹で円形にくくり合わせた物にインクを含ませ、これで軽く拭き、白紙を当て、その上に鉄葉板を平面に置き、歯車の機工で円木棍(側に円木棍を回転する所が有る)の下に入ると、たちまち鮮明に印出される。又別の部屋に入ると、数人が自分の所に遣って来て、自分の顔を描こうとして、酒菓を出して待遇し、且つ、石版の絵を二三枚くれたので、遠慮せずに貰った。午後4時過ぎにホテルに帰った。皆に遅れて食事をする。厨房で力持ちの婦人を見た。三十一二歳頃で、容姿は肥大で、米一斗に倍の水を入れた大鍋を両手で持ち上げて自由に上下する。男子二人分の力持ちの由。夜午後6時頃から、ホテルの前にて花火を打ち上げて饗応する。その盛大なる事は驚くべきことである。但し、音楽を演奏する者数十人、次に松明を携行する者三四十人、左右に分かれて行く。その次に防火具を車に載せた者若干名、その車に日本と米国の国旗を並べ立て、草花を四面に飾り、ガス灯を所々に点し、蒸気を盛んに噴出させているため、爛々として蒸気機関は皆烈火の様であった。その車の前後に数十人が配置し、各人が松明を持っている。この様なものが総計三四十隊有り、花火は各人が持って来た松明より飛び出て、花の様に開き散った。その美しいことは言葉に表わせない。花火の塵はホテルの屋上や或いは観客の頭上に落ちてくる。そのため、男女はその火を避けようとして雑踏極まりないものであった。ここに又一笑に付すことが有った。車上に日本人の服装をして首にカツラを被り、手に扇子を持って大声を出して通行する者が居た。まさに日本人の様であった。その他、数種の服装をして列を成して通行するのが二里【3.2km】に及んだ。観客の多くは立錐の余地も無く集まり、その様子は正に雲霞に似たものであった。人声の喧騒さは怒涛の様であった。その盛大さは千古に稀有である。夜の12時になってようやく静かになった。

○寒暖計不試

フィラデルフィア情勢

フィラデルフィアはペンシルバニア《Pennsylvania》州の大港である。東西に川

が有り、東にデナハレ《デラウェアDelaware》河が流れ、幅一里【1.6km】余り、長さ九十里余りで海に注いでいる。西にスコエケル《Schuylkill》河が流れ、幅半里【0.8km】余りである。何れの河も船舶の航行が頻繁で、一日に往来する船舶が幾数十艘なのか分からない。（オランダの書物に拠れば、フィラデルフィアの町並みは、碁盤の目の様になっていて、着船場の有る大通りは番数を以てこれを読んでいる。即ち、第一街、第二街、第三街と言う様に。もし番数を付け難い通りは、草木を目印として通りの名前としている。例えば、栗の木通り、胡桃通りの様に。【この市に来る】外国人に取っては、その名前を記憶して街路を尋ねるに最も便利である。）この両河間の距離は二里【3.2km】、その間が市街で南北は七里【11km】である。道路は縦横に碁盤の目の様に走っており、全て平たい敷石で歩道と車馬道を分離している。左右の店舗の前を歩道とし、真中を車馬道として、車馬道と歩道の境に楓の樹を植えている。市の造築時はワシントン市と同じである。大きな家屋は軒を接して並び建ち、何れも壮麗である。常時車馬が往来して寸暇も絶える事が無く、殊に富裕な商人が多く住み、家の内装に金銀を散りばめて、人目を引きつけている。これは海陸の利便が有り、且つ、条約交易港であるためだろう。且つ、この市は昔、ワシントン等が英国から独立する時に、会議を開いて英国の暴虐を数え上げ、軍隊を起こして、大義を民衆に示したところである。その後、賢人・君子が出て来て学校を開設し、天文・物理から絵画・言語学に至るまで具備する様になった。学芸の盛んなる事は、多くの市の中でも最上位である。人口は昔は7万人程であったが、今は60万人を超すということである（訳書には、「フィラデルフィア」が文明の中心地となったのは、古賢フランクリン氏《Benjamin Franklin：フランクリン。雷が放電現象であることを突き止め、避雷針を発明。独立宣言の起草委員の一人》の功に拠るものであると記載がある。フランクリン氏は仁愛篤厚で、人を熱心に教育した。1709年《1706年が正しい》英国植民地下のワシントン市に生まれ、1723年にフィラデルフィアに移り住んで学校を開設し、国民を一新させた。彼の学問は古今を通して広く博識を極め、学芸・技術等残す所が無い。実に稀有なる大賢である。国民は今になって彼の徳を顕彰し、彼を父母の様に敬愛していると言う事である）。

風俗

この都市は海陸の利便が有り、且つ、条約交易港であるため、極めて繁盛している。そのため、富裕でない家は無い。且つ、昔から民衆を良く教育して風俗を一新させた人が輩出したためか、特に気宇闊達な印象を受ける。外国の人を上手に待遇し、その心はまるで兄弟の様である。自分達はこの都市に来て六、七日滞在しているが、市中の男女がホテルに来て日本人一行と親密になろうとして、珍し

い物や貴重な品々を持って来て自分達に贈ろうとするが、警察によって禁止されており、自分達の部屋に入ることは許されていない。このため、ホテル外に男女が集合して日本人一行を待ち受けている。我々日本人がホテルから出て行けば彼等は多いに喜び、我先にと握手を求め抱き合って来、あちこちに導いて一つ残らず見せびらかす。彼らが売る物の値段を二つ付ける事は無く【原文は「其価ヲ貳ニセズ」とある。値切るという習慣が無いと解釈した。】、日本人が値段を安くしてくれと言うと米国人は驚いて直ぐにこれをただで日本人に与えた。米国の風習はこの様であり、市内の治安は良く貧困や盗賊は居ない。たとえ肢体不自由な人が居ても、教育して有用の人に仕立て上げている。このため、盲啞の人でも文字を認識し、健常者と同じである。政治と教育の行き届いていることは、このフィラデルフィア市を第一番とする。

時候

この市は北緯39度余りで、暖からず寒からずの気候であり、自分達が来た時は四月下旬であったが、【裏地のある】袷衣(あわせ)を用いていた。晴天が多く、雨が少ないと言う(訳書には、この市の温暖度は【平均温度】50度8分【10.4℃】であり、冬は30度1分【-1.1℃】、夏は70度4分【21.3℃】。七月・八月(日本の五・六月)の季節は、合衆国の中でこの市が一番暑いということである。)。

草木

道路にマツ・ヒノキ・カエデの樹が植えてある。草花は爛漫として咲いているが、その名前は分からない。蔬菜はキュウリ、エンドウマメ、ニラ、ニンニクの類を見かける。大根はあるが、日本の物に比べれば細くて小さく、色は青赤である。

生物

多忙で探している時間が無かった。

貨幣

この市には造幣局が数箇所ある。その建物は非常に大きく、合衆国の貨幣を皆ここで鑄造するとの事である。そのため、貨幣が多いのはこの市に及ばない。

以下は貨幣に関する巻八に抄録された記述を訳者(菅原)の独断的判断により転載した。(藍記部分)

『今回、フィラデルフィアに来て、米国が日本の貨幣価値を分析した【事を知った】。友人の某《加賀金沢の佐野鼎》が翻訳した内容を以下に記す。これは参考

に足る資料である。

【日本の】貨幣として、金・銀・銅・青銅・鉄が有る。その内、主たる貨幣を小判としている。六十年間の改正でその大きさは三様ある。形は楕円形で非常に薄く、且つ柔らかで簡単に曲げられる。それらの成分の多くは銀を混入しているけれども、表面は純金と見える。これは純金をメッキしてこの様にしているとの事である(この銀【金の間違いか】を溶解薬で表面から除去可能である)。

第一は、小判である(文字小判)。これは六十年が経過したものである。その量は二百零一グレイン半《201.5 グレイン⇒13.057 グラム》で、その 2/3 は金、1/3 が銀である。又、純度として 667/1000 は純金としている。その銀を混入した【小判の】価値は、5 ドル 95 セントに相当する。

第二は保字小判で、数年前までのものである。その量は 174 グレイン【11.275 グラム】で、その殆ど 4/7 は金で、3/7 は銀である。即ち、568/1000 を純金としている。その銀を混入した【小判の】価値は、4 ドル 40 セントに相当する。

第三・第四の小判は、正字小判で、甚だ新近のものである。【米国の】使節が【この小判を】分析しようと【日本に】再来した。この二品は唯小印点を異にするだけで、その他は全く似ている(二品有るのではなく、持主の私刻印を米国人は官の刻印と見たのだろう)。その量は、138.75 グレインで、純金は凡そ 571/1000 で、正確に 4/7 である。これを貨幣製造の基本としていると考えられる。その銀を混入した【小判の】価値は、3 ドル 50 セントに相当する。銀を除去した場合は、3 ドル 41 セントに相当する。

第五・第六は、小さい方貨である(二朱金であろう)。その表面に凡そ 1/3 の金をメッキし、その量は 25.5 グレインである。この名目及び価値の順位は何処に属するのかはっきりは分らない。

第七も方貨で、第二の小判の半量である(二分金であろう)。但し 1/4 よりもやや多く金を含んでいる。その他は皆銀である。この貨幣も前記の貨幣と同じで、理解が出来ない。

第八も方貨で、金一分と呼ばれている(保字一分)《一分判金》。その量は第二小判の 1/4 である。金の含有も殆ど第二小判と同じである。その価値は、1 ドル 11 セントに相当する。

第九・第十は正字一分の新金で、【米国の】使節が分析しようと【日本に】再来した。その量は第三・第四小判の 1/4 で、価値は 80 セント二分二厘に相当する。

第十一は、往時の半一分銀である(半一分は誤りで、古の一朱銀だろう)。この貨幣の一個は、凡そ 1840 年頃、太平洋に遠く漂流した日本の水夫輩を救育扶助した合衆国の測量船の将官が、その輩から貰った数貨の一個である。その後、合衆国の船が遭難し、その諸貨を失い、只この一個だけが残ったものである。

これを米国で日本の貨幣を検討するきっかけとなった。その量は 41 グレイン【2.66 グラム】で、殆ど純銀である。価値は 81 セントをやや超えるものである。但し、銀貨は全て方貨でやや厚くなっている。

第十二は、銀一分で、ほんの数年前のもので、その量は 134 グレイン半【8.716 グラム】である。純度は 981/1000 から 990/1000 までの純銀で、その価値は 36 セント 9 分、或いは 37 セントに相当する。

第十三は、その量が 28 グレイン半【1.847 グラム】あって、殆ど第十二の物と同じである。その価値は 8 セントに相当する。その名前を知らない。(多分一朱銀であろう)。

第十四は、新銀一分というもので、これも【米国の】使節が【日本に】再来した時のものである。この貨幣も往時の一分と同じ量がある。即ち、134 グレイン半【8.716 グラム】である。しかしながら、純度は 890/1000 の純銀である。これは米国製の貨幣の定則 900/1000 にやや近いものである。その価値は 33 セント二分八に相当する。

第十五は、紅銅の大きな厚い貨幣で楕円形である《天保銭の事》。その中心に四角の孔が開いており、百文銭と名付けられている。

第十六は、青銅の丸い貨幣で、中心に四角の孔が開いている。

第十七は、鑄鉄の丸い貨幣で、その周辺は甚だ雑である。これも中心に四角の孔が開いている。』

物価

この市は文化活動が盛んで、書籍が非常に多く、且つ工芸が完備しており、時計・顕微鏡・晴雨計の類は他の物に比較すると値段は安いと言う事である。今ここに例を示す。

- | | |
|-------------|-------------------|
| 一 時規 懐中時規一個 | 2 ドルから 200 ドルまで |
| 一 磁石器一個 | 1 ドルから 10 ドルまで |
| 一 地球分図一冊 | 50 セントから 70 ドルまで |
| 一 顕微鏡一個 | 2 ドルから 7 ドルまで |
| 一 指輪一個 | 25 セントから 500 ドルまで |
| 一 幻灯機一個 | 1 ドルから 30 ドルまで |
| 一 同画一枚 | 50 セントから 2 ドルまで |

ホテル

ホテルは近年造られた新築のもので大きく、且つ美しい。高さ 7 階で部屋数 600 個、各部屋は金色に塗られ、トイレ・浴室が備わっている。最下層は売店になっ

ており、客の必要とする品物を全て揃えている。建築・工作から洗濯に至るまで蒸気の機巧を利用し、人力を用いることは少ない。ホテルは常時千人を泊め、米国第一のホテルである。町名はチェスノットストリート《Chestnut Street》と言う。ホテルの名前はネンテルホテル《Continental Hotel》と言う。

【巻四 終】